

魅せられて 私の「歌」道標

私は四国の片田舎で生まれ育った。詳しくいえば、愛媛県喜多郡長浜町がふるさとである。十八歳までそこで暮らした。目の前に瀬戸内海が青く広がっていた。

中学生のとき、国語の宿題で初めて短歌を二首作った。うち一首は確か「降りつづく雨にバラの芽ぐんと伸び露をたたえて垣にまきつく」というようなものだった。あと一首は思い出せない。国語の教師は久保七郎という先生であった。ずっと後になって知ったのだが、その久保先生はアララギの会員で歌を作っている人だった。

そのように、何の変哲もない歌を一、二首作っただけで、以後も特に歌に興味を持つことはなかった。中学時代、昼休みは友達と相撲を取って遊び、放課後は美術部で絵を描いていた。海辺の学校だったから、静物画を描くときは近所から拾ってきた蛸壺たこづぼを描いたりした。

高校時代は汽車通学だったが、往復の車中で友達と将棋に熱中し

歌に出会うまで



高野公彦

た。高校は、松山工業高校の機械科であった。メカが好きで機械科に入ったのである。勉強は、数学や物理が得意だった。製図の時間に居眠りをして先生に叱しかられたこともあるが、おおむね真面目な生徒だった。実習の時間に、小型のキュボラで鉄を溶かし、鋳物を作ったことが楽しい思い出として残っている。

このころ、吉川英治の『宮本武蔵』を読破した。なぜそんな小説を読んだのか、よく分からない。小説のなかに、宮本武蔵が吉岡十二ガシの連中と決闘する場面があった。その様子を草むらの陰から見守っていた伊織という少年が、緊張のあまり「いばり」をもらした、と書いてあった。いばりとは小便のことをいう言葉だと知って、高校生の私は新鮮な気持ちになった。

つけ捨てし野火の烟のあかあかと見えゆ

く頃々山はかなしき

おのえさひめ
尾上柴舟

金色のちびさき鳥のかたちして銀杏ちる

なり夕日の岡に

与謝野晶子

十代のころ、こんな歌を読んだことがある。中学の時か高校の時か、はつきりしないが、記憶の隅に残っている。

高校を卒業し、横浜の日産自動車に入社した。日産では、研究部研究課という部署に配属された。新しいエンジンや車体の開発（あるいは改良）を担当する部署である。私は各種の実験のアシスタントとして、上司の指示どおりにいろんな実験に従事した。たとえば、エンジンの排気効率を高めるために作られた新しいエグゾーストパイプ（排気管）をエンジンに取り付け、エンジン回転数と排気圧の関係を調べたりした。あるいは、エンジンが回っている状態での、自動車内部の居住空間の各所における騒音のレベルを測る、という実験をしたこともある。

会社が終わると、電車で真つすぐに会社の独身寮に帰った。空腹なので途中でコッペパンを買い、食べながら駅から寮までの道を歩いた。歩きながら人生というものを考えることもあった。

実験はいやな仕事ではないが、人の指示どおりのことをしているだけ、という物足りなさを感じ始めていた。それに、とにかく日産は巨大企業なので自分の存在感がいかに希薄であった。無数の歯車の中の一つ、というより歯車の一つですらない、という感じがした。

まもなく一人で受験勉強を開始して、翌年、横浜国立大学の工学部機械工学科の二部（夜間）に入学した。だがそこで、難しい数学の授業について行けない自分を発見した。得意だった数学がダメな

のである。どうしよう、と私はほんやり考え込んでしまった。勉強はあきらめて、普通の会社員として生きてゆこうか。それとも、いつそ会社をやめて新たな道を探してみようか……。

ある日、私は工場地帯を走る貨物線の踏切に立って、目の前をゴトンゴトンと過ぎてゆく貨車の数をかぞえていた。もし貨車の数が奇数だったら会社に残ろう、もし偶数だったら会社をやめよう。

しかし、途中でかぞえるのをやめた。こんなことで自分の人生を決めるより、思い切って飛んだ方がいい。

退職届を出したのは、入社して一年四か月後、すなわち昭和三十六年八月であった。同時に横浜国立大学も退学した。すぐ上京し、文京区森川町に下宿して受験勉強を始めた。偶然、下宿の近くに石川啄木ゆかりの蓋平館という旅館があった。

毎日、予備校にかよって勉強し、下宿に帰ってから勉強した。勉強に飽きると、ステレオ・アンプを組み立てて時を過ごした。これは日産にいた時に始めた趣味である。部品はすべて秋葉原の電気街から買って来た。自分の組み立てたアンプから流れる音楽が、独りぼっちの寂しさをまぎらわせてくれた。そのころホール・アンカやコニー・フランシスなどの唄がはやってきた。「ロシリイ、ソルジャーボーイ」という曲もよく耳にしたが、あれをうたっていたのは誰だったのだろうか。

まだ理工科系に未練はあった。が、数学が無理だと思い、あいまいな気持ちで文科系に進むことにした。「古事記」に「くらげなす漂へる時」という叙述があるが、当時の私の心はちようどそんな状態だった。半年後、東京教育大学国文科を受験し、合格した。このとき二十歳になっていた。

入学後、当面の目標が見当たらず、授業にも身が入らなかった。

しかし大学に入ってよかったのは、友達ができたことである。勉強好きな友人の作った万葉勉強会に参加し、万葉の歌を少しずつ読んでいった。また、気の合った友人たちと授業をサボって喫茶店で雑談したり、夜、池袋あたりの安い飲み屋で一緒に酒を飲むのが楽しかった。そんなことをしながら、私は無意識のうちに自分自身の本当に求めているものを手探りで探していたような気がする。そんなある日、大学の生協で、『文芸読本「石川啄木」』（河出書房）という本を見つけて買った。何げなく買ったのだが、読んでゆくうちに引き付けられてしまい、自分でも歌を作りたくなった。

砂山の砂に腹這ひ

初恋の

いたみを遠く思ひいづる日

石川啄木

かなしきは小樽の町よ

歌ふことなき人人の

声の荒さよ

このような感傷的な歌が私の心を打ったのである。以前から啄木の歌は知っていたが、自分から歌を作ろうとしたのはこの時が初めてだった。

このころ（昭和三十年代後半のことだが）、一般的に文学の中では小説や詩が高級なものと見られていた。少なくとも私の目にはそう

映った。短歌や俳句は時代遅れのものとして蔑視されている気配があった。終戦直後のいわゆる第二芸術論の余燼がまだ残っていたのだろう。そういう雰囲気の中で短歌を作るのは、世間に背を向けているという一種の快感があった。私はほれほれと短歌を読み、ほれほれと短歌を作った。私を内部からつき動かしていたのは、機械に囲まれて働いた日産での体験であつただろう。

日産という巨大企業は、いわば合理主義・機能主義で動いていた。いや、決して日産の悪口をいうつもりはない。日本全体が合理主義・機能主義をエネルギーとして身をくねらすように成長している時期であつた。そのような時代の流れの中で、へ生命体・感情体としての人間が圧迫されているように私は感じたのである。短歌は、私にとってそのような圧迫に抵抗する小さな武器となつた。日本に古くからあり、かつ時代遅れのシロモノである短歌は、その「時代遅れ」という点が、むしろ拠り所となつたのである。

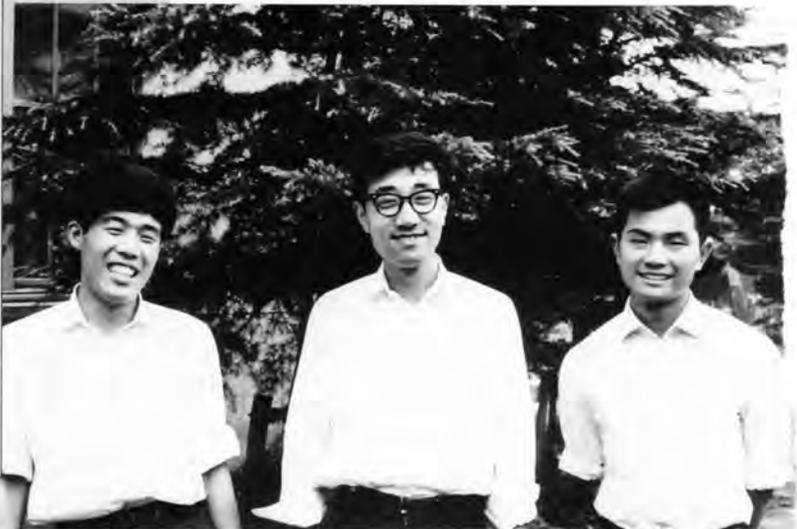
ただし、当時からそんなふうな事柄を分析的に考えていたわけではない。ただ夢中で啄木を読み、啄木ふうの歌を作っていただけである。

二年生になってから、友達と一緒に短歌研究会を作り、国文学科の峯村文人教授にお願いして、週一回、昼休みに先生の研究室で歌会を開いた。参加者は平均四、五名だつたように思う。峯村先生は『新古今集』研究の学者であるが、「潮音」所属の歌人でもあつた。私たちはお互いの歌を批評し、また先生に批評していただいて勉強した。

かたわら私は一人で白秋・茂吉・実朝などの歌を読んでいった。いい歌を作りたいためである。実作にもいつそう熱が入つた。そし

『天泣』より
高野公彦

我も生みし母の骨片冷をもちてほき一墓下
一壺中にて
やはらきふるき日まっ言葉もて原祭かぞふ
いふふみいよ
杖つきて歩く日が来む そして杖の重りぬ日
が来む 君も彼も我も
天泣の心る屋敷を園にべビーカールとつ
ありて人ぬす
遠く三日月、寄り橋、女体、うばたまの間に
しづかに身を反らすもの



短歌を作り始めた頃。左が筆者。(昭和39年、東京教育大学にて)

自選歌五首直筆

高野公彦 (たかの・きみひこ)

昭和16年愛媛県生まれ。東京教育大国文科卒。在学中に「コスモス」に入会、宮柊二に師事。現在「コスモス」選者。昭和60年「棧橋」を創刊。歌集に「汽水の光」「水行」「天泣」(平成9年若山牧水賞受賞)など。歌論集に「地球時計の瞑想」「うたの前線」などがある。

て歌は、いつのまにか啄木の亜流から脱出していた。ある日、図書館で釈道空の歌集『海やまのあひだ』を読んだ。強い衝撃と深い魅惑を感じた。

邑山の松の木むらに、日はあたり ひそ
けきかもよ。旅びとの墓
ながき夜の ねむりの後も、なほ夜なる
月おし照れり。河原菅原

釈道空

一見、現代から遠く隔たった世界がうたわれているが、しかし心の深い所にひそんでいる生命感情とでもいべきものが一首一首の中に息づいていた。私はじっとしていられなくなり、歌集を書き写していった。写しながら多くのことを学んだ。私は啄木によって歌に出会い、道空によって再び歌に出会ったのである。昭和三十八年、自分の力を試してみたくなって朝日新聞の歌壇に投稿した。

夏真昼木をひきつくししんと丸のこ
ぎりは回りけるかも

初めて投稿したこの一首が歌壇(八月四日)に載った。嬉しくてその後も一年余り投稿をつづけたが、昭和三十三年の秋「コスモス」に入会し、投稿はやめた。歌の本当の出発はその時点であろう。